

宮崎県椎葉村利根川・大久保地区の民家と馬屋の研究

土田 充義・揚村 固・晴永 知之

(受理 平成8年5月31日)

A Study on rural houses and horse huts of Tonegawa and Okubo district in Shiiba Village of Pref. Miyazaki

Mitsuyoshi TSUCHIDA, Katamu AGEMURA and Tomoyuki HARUNAGA

Rural houses of Tonegawa and Okubo district were built at about the middle of the 19th century and arranged in one row of four rooms-Koza, Dei, Uchine and Dozi. The largest room is Dei in Tonegawa district, and two rooms-Dei and Uchine are equal in size in Okubo district. These rooms were planned in half size in early Showa era and used by 1.909 meters in one unit. Before early Showa era these rooms were used by 1.818 meters on one unit both in Tonegawa district and in Okubo district.

Nine horse huts were examined in Tonegawa district and five horse huts were examined in Okubo district. Total thirteen except one are consisted of three parts-the horse way, occupied place of the rotten straw and horse living place. The horse living place is from nine meters to ten meters in length and from eight meters to nine meters in width. One horse living place covers an area measuring 8.5×9.5 meters and one child horse living place covers an area measuring 6×9 meters.

1. 民家と馬屋の配置

宮崎県椎葉村利根川地区(写真1)の調査を平成4年夏に行い、大久保地区は平成7年9月に4日間調査し、それらの結果を報告書として提出した。^{注1)}そのうち民家・馬屋・倉の配置については日本建築学会中国・九州支部で報告した。^{注2)}それらの配置について利根川地区でも大久保地区でも共通しており、主屋群を三方から取り囲むように馬屋が配置され、その外側に倉が点在してとり囲んでいた(図1, 2, 3, 4参照)。倉が火災から免れるために主屋から離して建てることは各地に見うけられる。例えば鹿児島県大島郡大和村では群として倉をまとめている。利根川地区・大久保地区は群倉としてまとめることはせずに、街路に沿って点在している。起伏の多い山村地帯では街路こそ大切な役割を果たしていたから、街路に沿って建てるこ



写真1 椎葉村集落
(遠望が利根川地区・左手前大久保地区)

とは当然なことであった。

その運搬には馬を使い、馬の通れる街路に倉があれば便利であっただろう。この街路に視点をあてて、馬

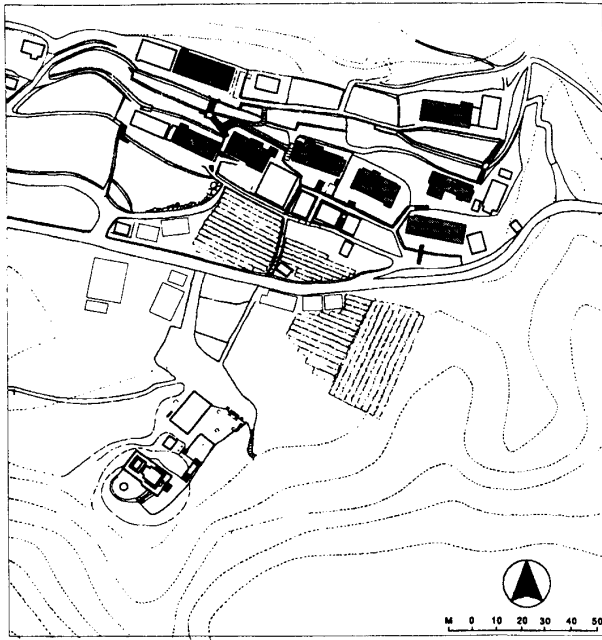


図1 主屋の分布

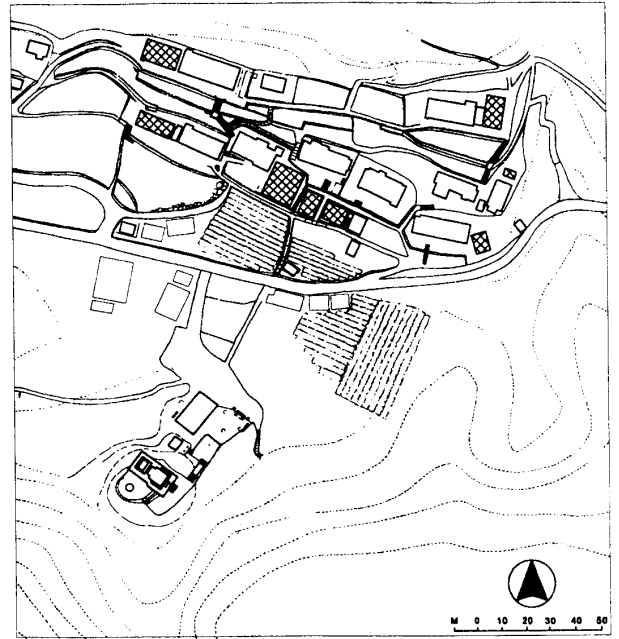


図2 馬屋の分布

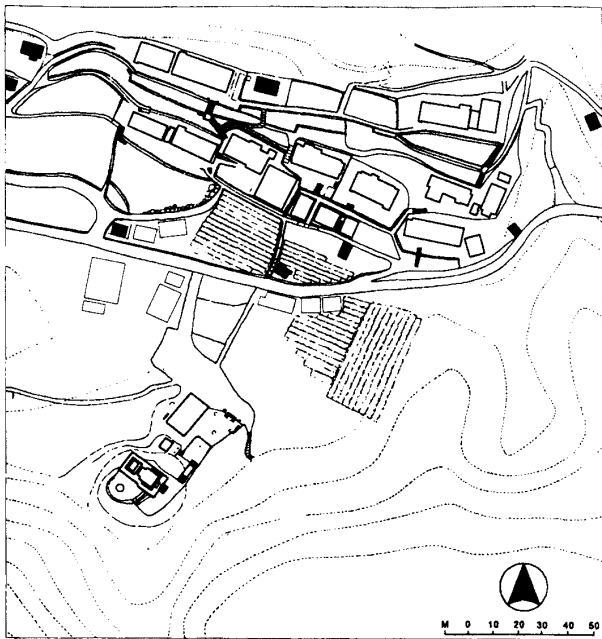


図3 蔵の分布

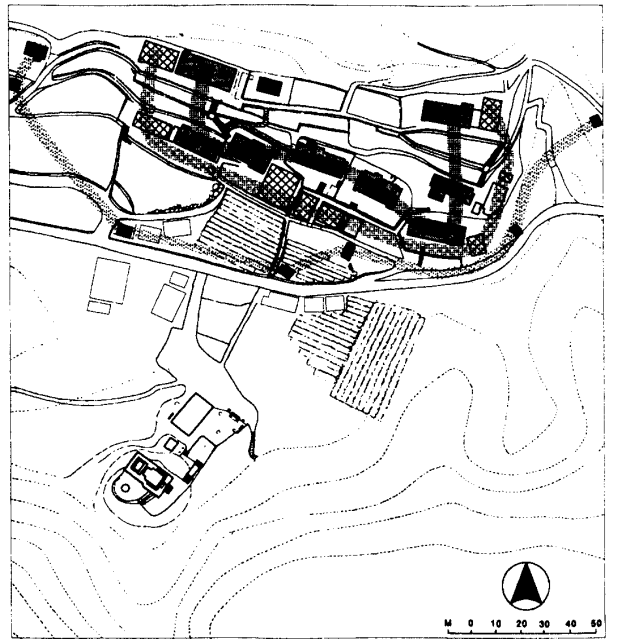


図4 主屋・馬屋・蔵の分布

屋を見ると多くの馬屋が街路に沿っていることがわかる。集落の前面にあたる南側を街路が通り、集落内を貫通する如く街路があるわけではないから、全部の馬屋が街路に面することができない。その場合でも馬の道は主屋の前を通ることも、主屋へ通じる道を通ることもしない。この主屋への道を表の道とすれば、馬の

道は裏の道といえる。それらがうまく有機的に関連している。このことが主屋と馬屋の配置を考える場合に重要なことである。

次に馬屋の造りがしっかりしているということである。柱が太く、多くが2階建てで、見事である(表1・表2参照)。

表1 利根川地区の馬屋

番号	所有者	住所	建立時代	構造形式	改造程度	保存状況	備考
1	那須恒平	利根川947	大正10年	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	良好	家屋台帳
2	那須定美	利根川939	昭和25年頃	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	中	家屋台帳
3	那須永治	利根川944	昭和36年	入母屋造・棧瓦葺・ 横板壁2階	中	中	墨書
4	那須輝美	利根川942	昭和初期	切妻造・トタン葺 ・横板壁・2階建	中	悪い	
5	那須光蔵	利根川927	昭和初期	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	中	中	昭和27年 増築
6	那須 忠	利根川930	大正10年4月	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	良好	墨書
7	田原正広	利根川946-1	昭和30年11月	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	良好	棟札
8	那須東輝勝	利根川928	昭和33年以降	切妻造・トタン葺 ・横板壁・平屋建	小	悪い	
9	那須勝義	利根川985	昭和37年1月	入母屋造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	良好	板図墨書

表2 大久保地区の馬屋

番号	所有者	住所	建立時代	構造形式	改造程度	保存状況	備考
1	那須宏幸	下福良 761	昭和初期	入母屋造・棧瓦葺 ・1階横板壁・2階縦板壁 ・2階建	中	良好	下屋に浴室と便所 両側に下屋を出し 増築
2	那須瑞穂	下福良 768	昭和33年頃	入母屋造・トタン葺 ・縦板壁・平屋	中	良好	南側に便所を増築
3	那須利光	下福良 775	昭和30年代	切妻造・棧瓦葺 ・横板壁・2階建	小	良好	
4	椎葉吉次郎	下福良 816	昭和44年頃	切妻造・トタン葺 ・縦板壁・平屋建	大	悪い	
5	那須利行	下福良 789	昭和20年代	切妻造・トタン葺 ・縦板壁・平屋建	小	中	柱に4本の貫を通し、 内側に縦板を張る。

その馬屋は必ず主屋の土間（「どじ」）側に位置して、神棚やトコがある「こざ」と反対側にある。つまり街路近くに「こざ」があるので、馬屋は奥まっており、馬屋から裏道へ繋がっている。主屋の棟と馬屋の棟とが平行になったり、直行したり、少し離れて建てられたりする。その規模は大で、1頭だけの馬屋はなく、少なくとも2頭は入る馬屋である。馬屋は馬が入る部屋だけでなく、馬の通路や堆肥を置く所もあるので、広くならざるをえないし、2階に干し草を置くことか

ら、ツシ2階程度で低いにしても、棟が高くなる。そこで全体として大きな馬屋になった。主屋の次に立派な建造物であった（写真2・図5参照）。

2. 民家の間取りの変遷

椎葉の民家は一列型平面形式（図6参照）を有することから、他地域と異なり、注目されることになった。その椎葉の民家の研究は鹿島秀（昭和16年には宮崎県立工業学校長であった）氏が行った昭和2・3年頃の

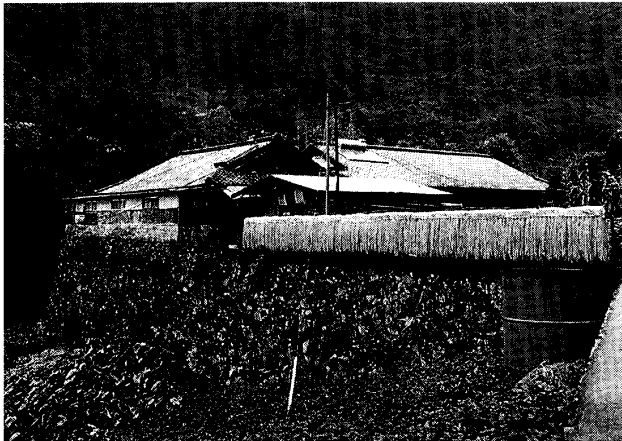
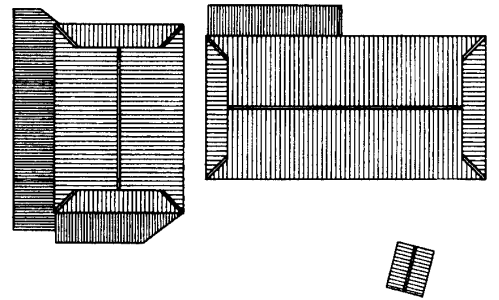
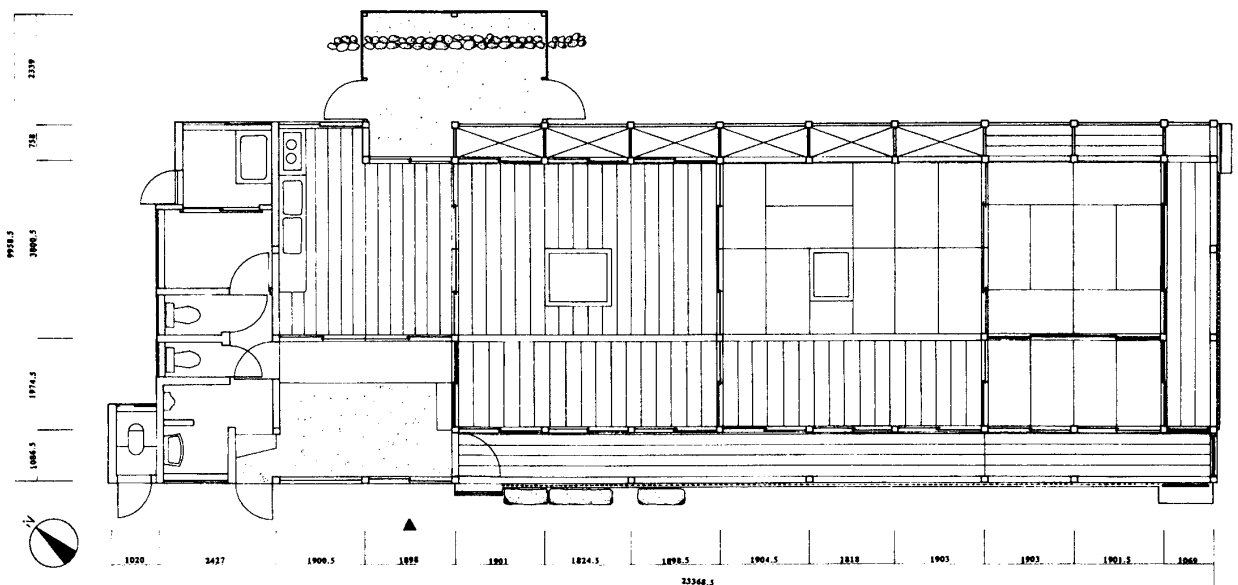


写真2 石垣上に立つ那須宏幸氏住宅
(右が主屋、左が馬屋)



0 1 2.5 5 10M

図5 那須宏幸氏住宅の屋根伏図
(右が主屋・左が馬屋)



0 1 2 3M

図6 那須利光氏住宅現状平面図
(右側より「ござ」・「でい」・「うちね」・「どじ」と並ぶ)

調査が嚆矢といわれている。^{注3)}その後前田松韻^{注4)}石原憲治^{注5)}今和次郎^{注6)}そして関野克^{注3)}の研究がある。最近では民家緊急調査報告書が刊行されている。^{注7)}ここでは椎葉の民家を10棟調査しているが、利根川地区や大久保地区の民家を調査対象として含まれていなかった。この調査では宮崎県内の民家をA・B・C型と区

分した。その区分に対し、角田三郎氏は「宮崎の民家」^{注8)}で更に細かく分けて、民家緊急調査報告書のA型を高千穂地方の民家、椎葉地方の民家(椎葉型)、西米良地方の民家(米良型)としている。

さて、この利根川地区を最初に調べたのは鹿島秀と前田松韻であった。このことは関野克著「宮崎県椎葉

村の民家調査報告書」(昭和29年)に記されており、その時調査した住宅是那須信証氏と那須幾右衛門氏住宅であった。そのうち那須幾右衛門氏住宅は昭和33年の火災で焼失してしまい、那須信証氏住宅は今回調査しえなかった。報告書によると両住宅とも「ござ」・「でい」・「うちね」・「とじ」・「どじ」と一列に並ぶ3室住宅であった。この形式の住宅は利根川地区で3棟(那須恒平氏住宅、那須丞治氏住宅、那須忠氏住宅)、大久保地区で3棟(那須瑞穂氏住宅、那須利光氏住宅、那須利行氏住宅)確かめえた。だが江戸時代とする明らかな根拠はなく、むしろ明治に入って建てられたとする方が妥当であろう。それら6棟の特徴は次の通りまとめよう。

- ①「ござ」・「でい」・「うちね」・「どじ」が並ぶ一列住宅である。
- ②前面に濡縁半間、奥1間通りに盲敷居を入れ、背面半間通りに戸棚を入れる。
- ③利根川地区では「でい」が最大の部屋で正面3間を有し、大久保地区では「でい」と「うちね」が正面3間である。
- ④柱間内法寸法は6尺を単位寸法としている。

以上4点が利根川地区・大久保地区の椎葉型民家の特徴であった。これらの特徴が建設時代と共はどう変化するかを調べ、その結論だけを先にまとめると次の4点が指摘できる。

- ①昭和初期になると前面の濡縁が内縁に変化する。と同時に盲敷居の位置が奥に入り、建具を入れることで部屋を縮小する。
- ②昭和33年以降になると一列型住宅が崩れて、座敷が突出したり、「ござ」が失われたりする。
- ③時代が下るにしたがって、正面間口が最も広がった「でい」が狭くなる。
- ④時代が下ると柱間寸法は6尺の単位寸法だけでなく、6尺3寸が出現する。

以上の間取りの変遷をもう少し詳しく調べてみたい。

利根川地区で最も大きな部屋は「でい」であり、大久保地区では「でい」と「うちね」であることを述べた。それはいずれも間口が3間で広い。重文指定の江戸期の鶴富屋敷は「でい」の間口が3間半もある。わずか半間の大きさにすぎないが、広さになると17畳半になり、盲敷居で区切られた「でいしたで」7畳を加えると24畳半となる。建具で仕切られた部屋の大きさとして、これだけの広さはあまりない。次に広い部屋

是那須輝美氏住宅の「でい」18畳である。当家は神職の家柄であり、この「でい」には神棚があり、神を祭る儀式の場であるといえる。盲敷居がとり除かれて18畳になったわけではなく、当初から内法寸法18尺正方形で設計されていた。この18畳の大きさは人間の生活空間というよりは、儀式の空間というにふさわしい。この考えを進めると、鶴富屋敷で「でい」(24畳半)も同じく、儀式の空間ということになろう。儀式空間というと利根川神社神楽殿がある。この神楽殿は昭和16年に創建し、昭和33年に茅葺きから瓦葺きに改め、昭和52年に大きく改造され、現在に至っている。神楽殿の広さは56畳敷で中央に柱が立っている(写真3・図7)。それは正面4間で側面7間に畳が敷き詰められる。畳を敷くために畳みの大きさ(6尺3寸×3尺1寸5分)に合わせている。神楽を舞う広さは正面2間、側面2



写真3 利根川神社神楽殿内部

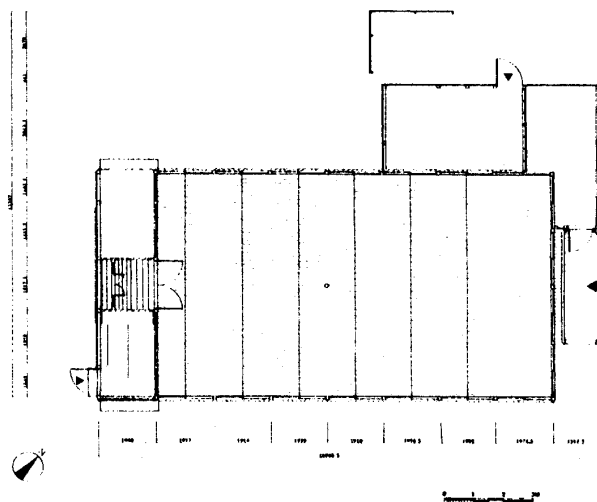


図7 利根川神社神楽殿現状平面図

間程度で、その大きさは約8畳である。周囲に少し余裕をもたせて、12畳半(2間半×2間半)あれば十分である。「でいうわで」が12畳とする大きさが多いのも儀式空間、つまり神楽を舞う空間にふさわしい(表3)。それが昭和16年に神楽殿が神社の境内に設けられると儀式空間から生活空間へと「でい」は変化をし、12畳が8畳や6畳の部屋に縮小されることになった。

3. 民家の設計寸法

利根川地区・大久保地区の実測民家15棟を推定年代別に並べると、昭和初期から設計寸法6尺3寸が現れる。それまでは内法寸法が6尺を単位として設計されている(表3参照)。実は内法寸法を用いることは設計技術が進んでいるといわなければならない。

それにしても6尺を単位寸法としていることは他の地域と異なる。この単位寸法6尺は利根川地区でも大久保地区でも比較的古い時期から用いられていた。18世紀の遺構がないので、何時から用いられるに到ったか明らかではない。现阶段で確認できるのは江戸末である。その頃に長さ6尺の畳が存在した。他の地域で

長さ6尺の畳を探すと沖縄の民家が6尺単位の内法寸法を用いている。その他九州地区内では見られない。すべての重文指定と由緒ある茶室の畳の大きさを調べたが、いずれも6尺3寸の畳を敷くための設計であった。この単位寸法6尺について、今後検討を要すことではあるにしても、この地域において独特であり、重要や意味を有していることを指摘しておきたい。

各部屋の内法寸法から1間の長さを計算すると差が少なく、6尺と6尺3寸に分けることができる(表4参照)。1間を6尺3寸とする寸法大系は昭和初期までしかたどることができない。旧薩摩藩麓集落の武家住宅は内法寸法6尺3寸が用いられていた。また九州内で他の地域でも例えば福岡県八女市の町家は内法寸法6尺3寸を用いていた。したがって、他の地域から利根川地区、大久保地区に影響を与えて、6尺3寸の寸法大系が成立するにいたったといえる。どのような導入過程をたどったか明らかにしえないが、外部からの影響で6尺3寸の寸法大系が昭和初期に成立したことだけは確かである。

表3 「うちね」「でい」「ござ」の大きさと設計寸法

番号	住宅の名称	建立時代	「うちね、 うわで」 単位：畳	「でい、 うわで」 単位：畳	「ござ、 うわで」 単位：畳	内法単位寸法
	鶴富屋敷	1859年頃	10	17.5	12.5	6尺
	椎葉鉄造氏住宅	19世紀	15	15	10	決定し難い
3	那須丞治氏住宅	明治初期	12.5	15	12.5	6尺
12	那須利光氏住宅	明治初期	12	12	8	6尺
6	那須忠氏住宅	明治初期	10	12	10	6尺
1	那須恒平氏住宅	明治15年頃	10	12	6	6尺
16	那須利行氏住宅	明治20年代	12	12	6	6尺
11	那須瑞穂氏住宅	大正14年	12	12	8	6尺
4	那須輝美氏住宅	昭和3年以降	15	18	9	6尺
10	那須宏幸氏住宅	昭和初期	12.5	6	3	6尺3寸
2	那須定美氏住宅	昭和6年	6	4.5	8	6尺3寸
7	田原正宏氏住宅	昭和8年	16	9	8	6尺3寸
5	那須光蔵氏住宅	昭和27年	8	12	10	6尺
8	那須東輝勝氏住宅	昭和33年	8	7.5	8	6尺
9	那須勝美氏住宅	昭和39年	8	6	4.5	6尺3寸
13	那須倉蔵氏住宅	昭和44年	6	8	なし	6尺3寸
14	那須良市氏住宅	昭和44年	4.5	6	なし	6尺3寸
15	椎葉吉次郎氏住宅	昭和44年	6	6	なし	6尺3寸

表4 各部屋の内法柱間寸法(単位ミリ)と単位寸法(単位尺)

番号	住宅の名称	建立年代	うちね		てい		こざ		平均	
			正面	側面	正面	側面	正面	側面	正面	側面
3	那須丞治氏住宅	明治初期	2.5間:4563 6.024	3.5間:6375 6.011	3間:5475 6.023	3.5間:6394 6.029	2.5間:4586 6.055	3.5間:6386 6.022	6.034	6.020
12	那須利光氏住宅	明治初期	3間:5457 6.003	3間:5461 6.008	3間:5461 6.009	3間:5464 6.011	2間:3642 6.009	3間:5477 6.025	6.007	6.015
6	那須忠氏住宅	明治初期	2.5間:4552 6.009	3間:5465 6.011	3間:5465 6.012	3間:5465 6.013	2.5間:4557 6.016	3間:5470 6.018	6.012	6.014
1	那須恒平氏住宅	明治15年	2.5間:4572 6.036	3間:5476 6.025	3間:5464 6.011	3間:5454 6.000	1.5間:2737 6.022	3間:5474 6.022	6.023	6.015
16	那須利行氏住宅	明治20年	3間:5470 6.017	3間:5476 6.025	3間:5461 6.008	3間:5479 6.027	1間:1833 6.049	3間:5480 6.028	6.025	6.027
11	那須瑞穂氏住宅	大正14年	3間:5457 6.003	3間:5462 6.009	3間:5463 6.009	3間:5461 6.008	2間:3635 5.992	3間:5465 6.012	6.001	6.009
4	那須輝美氏住宅	昭和3年以降	2.5間:4552 6.009	3間:5460 6.007	3間:5462 6.009	3間:5473 6.021	1.5間:2723 5.991	3間:5455 6.002	6.003	6.01
10	那須宏幸氏住宅	昭和初期	2.5間:4787 6.315	3.5間:6798 6.410	3間:5898 6.323	3間:5739 6.313	1.5間:2868 6.310	3間:5739 6.313	6.316	6.345
2	那須定美氏住宅	昭和6年	2間:3846 6.347	3.5間:6722 6.339	1.5間:2867 6.308	3.5間:6697 6.315	2間:3823 6.309	3.5間:6689 6.308	6.321	6.321
7	那須正宏氏住宅	昭和8年	2.5間:4779 6.309	3.5間:6692 6.311	3間:4729 6.303	3.5間:6687 6.306	2間:3814 6.295	3.5間:6682 6.301	6.302	6.306
5	那須光蔵氏住宅	昭和27年	2間:3640 6.306	3.5間:6517 6.146	3間:5464 6.011	3間:5469 6.017	2.5間:4545 6.001	3.5間:6470 6.101	6.006	6.088
8	那須東輝勝氏住宅	昭和33年	2間:3642 6.010	2間:3631 5.993	1.5間:2700 5.941	2.5間:4528 5.978	2間:3658 6.036	4間:7278 6.005	5.996	5.992
9	那須勝美氏住宅	昭和39年	2間:3822 6.307	3.5間:6689 6.308	2間:3822 6.307	3間:5731 6.305	1.5間:2867 6.308	3間:5735 6.310	6.307	6.307
13	那須倉蔵氏住宅	昭和44年	1.5間:2872 6.319	3.5間:6711 6.328	2間:3829 6.318	3.5間:6722 6.338	なし	なし	6.318	6.333
14	那須良市氏住宅	昭和44年	1.5間:2871 6.316	3間:5741 6.316	2間:3820 6.303	3間:5738 6.312	なし	なし	6.309	6.314
15	椎葉吉次郎氏住宅	昭和44年	1.5間:2867 6.300	3.5間:6755 6.369	2間:3822 6.306	3間:5725 6.298	なし	なし	6.303	6.333

4. 馬屋の特徴

馬屋の調査は利根川地区で9棟、大久保地区で5棟であった。いずれも主屋に次ぐ大きさで、当初の姿は主屋と同様入母屋造浅瓦葺きの建物で、馬屋には干草などを置くために天井の低い2階がある。そのために棟の高さは主屋とほとんど変わらず、堂々とした造りであった。

馬屋には干草などを置く2階と同じく堆肥を置く場も必要であった。片側を馬屋の部屋(馬舎と称す)とすると他の片側を堆肥を置く場として、それらの間が馬の通り道であった。したがって、馬舎スペースの何倍かが馬屋の大きさ(表5参照)で、その倍数はまちまちである。その理由として、馬屋に便所が設置されていたり、ミソや米を入れる収納所が付け加わっていたり、物置を馬屋にとり入れたりしているからである。それらを除いて堆肥を置く場、馬の通路、馬舎を馬屋とすると馬舎の約3倍が馬屋の大きさになる。那須宏幸氏馬屋は丁度馬の部屋の3倍であった(図8参照)。つまり馬屋の内部を占めるそれぞれの割合は馬屋の半分が堆肥の置き場、残りの半分のうちの3分の1が馬の通路で、残りが馬の部屋となる。つまり馬屋を6等分すると馬の部屋が2、馬の通路が1、堆肥の置く場

が3ということになる。この割合は正確な場合もあるが、多少の幅がある。那須東勝氏馬屋は昭和33年の火災で、馬屋近くに仮の住居を建てた時、馬屋の一部を解体したので大きさを確かめえなかった。それで馬舎だけが独立しているので、馬の通路も堆肥置き場もない。那須忠氏馬屋や那須勝義氏馬屋は馬の部屋の6倍以上が馬屋の大きさになっているが、付加した便所や物置を除くと那須忠氏馬屋は3.4倍弱に、那須勝義氏

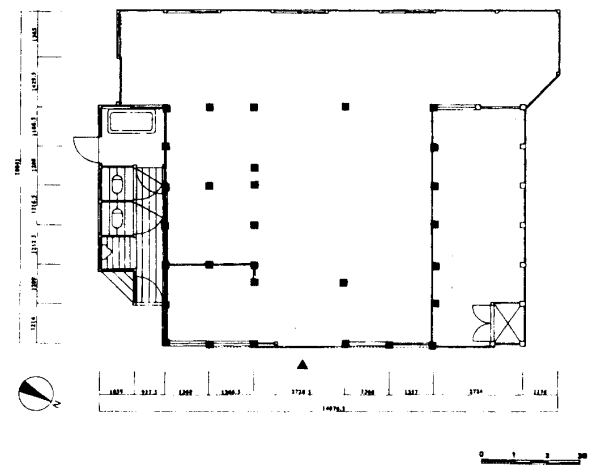


図8 那須宏幸氏馬屋現状平面図(■印は馬屋の柱)

表5 馬屋一覽

所有者	建立年代	馬屋の形態	馬屋の大きさ	馬一頭分のスペース	馬舎	馬屋の大きさと馬舎との比
那須恒平	大正10年	入母屋造浅瓦葺 便所を西端に設ける。	6,256×11,616 (20.6×38.3)	2,418×3,040 (8×10)	2	4.9
那須忠	大正10年4月	入母屋造浅瓦葺 便所を西側に設ける。納屋が付く。	7,260×12,670 (24×41.8)	2,720×2,700 (9×8.9)	2	6.2
那須瑞穂	大正14年	入母屋造トタン葺 南側に便所を新しく接続させる。	7,281×8,855 (24×29.2)	3,200×3,635 (10.5×12)	2	2.7
那須利行	大正末~昭和初	切妻造トタン葺	5,452×10,010 (18×33)	2,726×3,044 (9×10)	2	3.3
那須宏幸	昭和初期	入母屋造浅瓦葺 下層に浴室と便所、西側に下層を出し増築。	7,247×10,904 (24×36)	2,423×2,726 (8×9)	3	4
那須光蔵	昭和初期	切妻造トタン葺	6,100×7,716 (20×25.4)	2,390×3,046 (7.9×10)	2	3.4
那須輝美	昭和初期	切妻造トタン葺 東側に物置が付く。	5,020×7,850 (16.5×26)	2,510×3,014 (8.2×10)	2	2.6
那須定美	昭和25年	入母屋造浅瓦葺	7,330×9,553 (24.2×31.5)	2,560×2,840 (8.4×9.4)	3	3.5
田原正広	昭和30年11月	入母屋造浅瓦葺 東側物置、西側便所。	7,900×12,430 (26×41)	2,740×2,740 (9×9)	3	4.3
那須利光	昭和30年代	切妻造浅瓦葺 収納室が付く。	9,111×12,739 (30×42)	2,580×2,729 (8.5×9)	4	4.1
那須東輝勝	昭和33年以降	切妻造トタン葺 馬屋と付属屋が通路で接続。	4,832×3,040 (16×10)	2,416×3,040 (8×10)	2	1
那須丞治	昭和36年5月	入母屋造浅瓦葺 北側に便所・物置が付く。	9,091×10,906 (30×36)	2,725×2,732 (9×9)	4	4
那須勝義	昭和37年1月	入母屋造浅瓦葺 米・味噌の収納室が付く。	8,040×10,969 (26.5×36.2)	2,580×2,577 (8.5×8.5)	2	6.6
那須吉次郎	昭和44年以降	切妻造トタン葺 収納室が付く。	7,294×9,117 (24×30)	2,431×2,723 (8×9)	2	5

単位ミリ ()内の単位は尺

馬屋は3.5倍強に減少する。また、那須利行氏馬屋を復元すると3.3倍になる(図9・写真4参照)。同じく那須利光氏馬屋を復元すると3.05倍になる(図10参照)。以上のことから、馬屋はただ単に馬を入れるだけでなく、馬の通路や堆肥置き場もセットになっていたことが分かる。馬を馬舎に入れる場合に一度馬屋に入れて、その後馬舎に入れる。一般に考えられることは外から直接馬を馬舎に入れば、馬屋の広さを減少させることができる。しかし、利根川地区や大久保地区では石垣の上にぎりぎりまで寄せて馬屋を建てるために、外から直接馬を入れられないことになる。また馬屋内の馬の通路は別に馬だけが通るだけでなく、干草を運んだり、馬の部屋の藁を外に出して堆肥置き場に運んだりする通路にも使われていた。多目的に使う通路であったというべきかもしれない。そのように通路が必要であるなら、馬が通る道として便乗することもありえただろう。

また、馬が外の明るい所から馬屋内の暗い所に入れて外に面した馬舎の明るい所に進むことは馬にとって好ましいことかもしれない。種々の理由によって、馬屋内に馬の通路が設けられたといえるだろう。堆肥置き場を馬屋内にきちんと設けることも狭い土地を有効に利用することから必要だった。それに馬屋に物置を付加したり、収納する倉として一部を使ったり、便所を増設したりした。その中心に馬屋があった。当地においては馬屋は大切な役割を果たしていた。

5. 馬屋の大きさ

馬一頭が入るスペースはどの程度であるか、甚だ興味があり、多くの人が関心を示す問題である。馬は食事をしたり、寝たり、適度の運動をするスペースが必要であろう。その馬の部屋の大きさを実測値から調べてみた。実測した14棟の馬屋のうち、馬屋内に馬舎を4箇所設けているのが2棟、3箇所設けているのが3棟、2箇所設けているのが9棟で、1箇所しか設けていない馬屋はなかった(表5参照)。それらの馬屋の多くは柱真々寸法を完数尺で決めていた。馬舎も完数尺で設計されていた。例外として5棟あるが半分である5寸まで完数尺に含めると2棟のみになってしまう。

馬舎の大きさをグラフに表すと(表6参照)、3箇所所の例外を残して、すべてがある範囲内に入る。その範囲は長い方が9尺から10尺、短い方が8尺から9尺である。その面積は畳の大きさを長手方向を6尺とすると4畳から5畳の大きさになる。この範囲内に重文

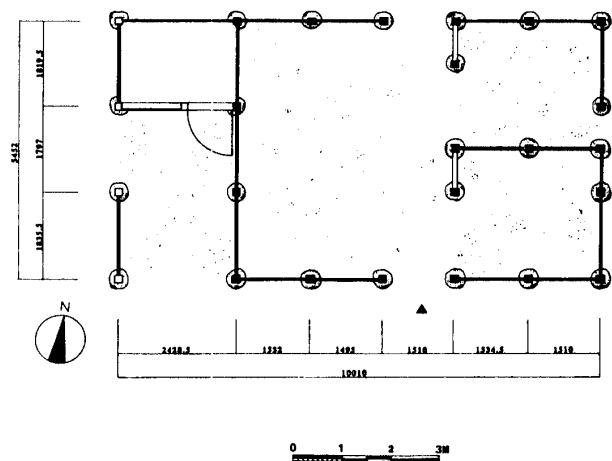


図9 那須利行氏馬屋現状平面図(■印は馬屋の柱)

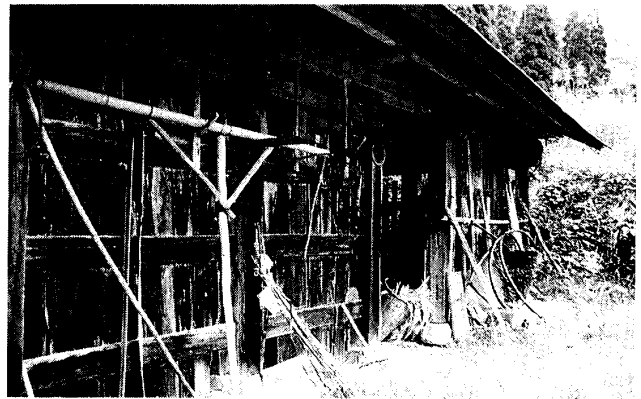


写真4 那須利行氏馬屋外観

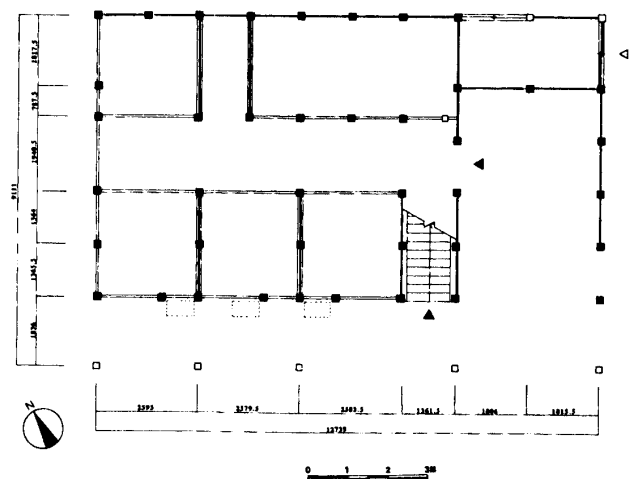
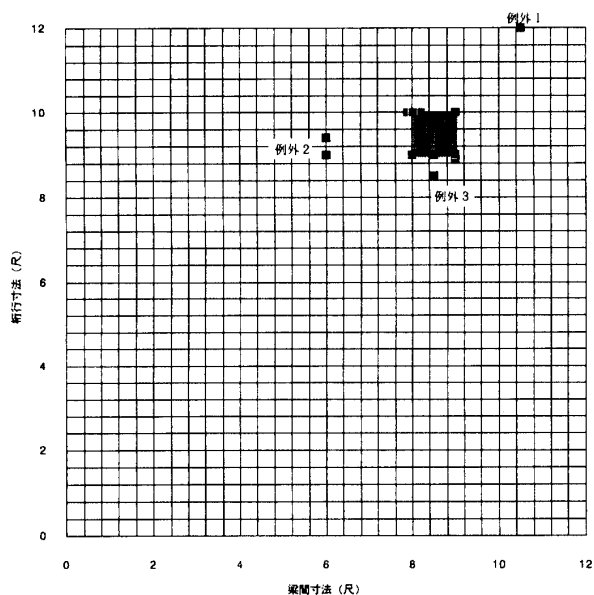


図10 那須利光氏馬屋現状平面図(■印は馬屋の柱)

表6 馬一頭分のスペース比較



指定の北海道大学第二農場耕馬舎（明治10年建立）があり、大きさは9尺正方で4畳半になり、平均的な値を示している。

例外となる3箇所について調べてみたい。最初の例外は那須瑞穂氏馬屋（図11参照）で、馬舎の大きさが大きい（10.5尺×12尺）、それは7畳で、平均値の1.5倍以上である。2頭分のスペースかもしれないが、よく分からない。

次は平均値の3分の2の大きさについてである。この大きさ（6尺×9尺）の馬舎だけでなく平均的な馬舎（9尺×9尺）と共存する。したがって、子馬をいれるスペースかもしれない。付属として小さな部屋を設けたにすぎないので、部屋そのもののスペースとして問題にしないでよいだろう。

最後の部屋の大きさは8尺5寸の正方形の部屋についてである。長い方が9尺以下であるために例外としてあつかったが、面積では約4畳であり、馬一頭のスペースとして十分である。したがって、例外とせず、許容範囲の枠外とした方がよいだろう。

以上のように例外となる3箇所のうち、1箇所だけが例外としてのこる。また例外といえる馬舎があることはそれだけ馬一頭のスペースを確かめるということにもなるだろう。

ここで大切なことは馬一頭が入るスペースは4畳半前後の大きさであるということと、柱真々寸法で完数尺を用いて設計されているということである。

最後にこの調査にあたって、村長さんはじめ、教育長、それに教育委員会の皆さんには大変お世話になっ

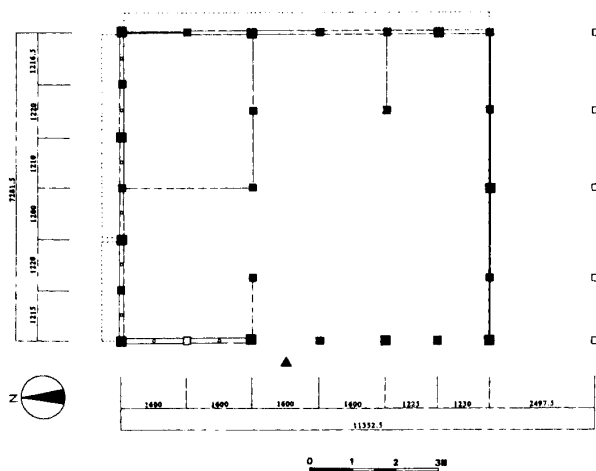


図11 那須瑞穂氏馬屋現状平面図（■印は馬屋の柱）

た。また那須恒平さんはじめ地区住民の皆さんには部屋の隅々まで調べさせていただき、ご迷惑をおかけし、ご多様ななかにも時間を割いて、質問に応じていただいたり、梯子をかけて屋根裏を見せていただいたりした。数えればきりが無いが、多くの犠牲の上のご協力だった。それに院生・学生と共に汗を流し、暑い中よく実測してくれた。ここに記して感謝の意を表すのである。

注1 「椎葉村利根川地区山村集落伝統的建造物群保存対策調査報告書」平成5年3月 椎葉村教育委員会

「椎葉村大久保地区山村集落の調査報告書」と題して平成8年3月に椎葉村教育委員会に提出した。

注2 「椎葉村利根川地区山村集落の配置計画について」（アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究5）日本建築学会研究報告 中国・九州支部第10号計画系 1996年3月

注3 関野克著「宮崎県椎葉村の民家調査報告書」昭和29年12月

注4 前田松韻「宮崎県椎葉村の民家に就きて」建築学会論文集 第28号 昭和18年12月

注5 石原憲治「五家荘より椎葉へ」民俗建築第4号 昭和27年1月

注6 今和次郎「日本の民家」1954年3月 増補改訂

注7 「宮崎県の民家、民家緊急調査報告書」1972年 宮崎県教育委員会

注8 角田三郎著「宮崎の民家」1981年2月 鉾脈社